

『遠野物語』のリアリティー（その二）

高橋 康雄

第二章 水を源とする「物語」

遠野という名前自身にアイヌ語のトーノすなわち湖への消息を第一章では伝えたわけだが、淵源があればさらに支脈が生まれることになる。川であり、その川に伝わる物語の淵が随所に横たわるという次第。当然のことながら『遠野物語』にも水源に発する物語は欠かせない。しかもその水源の物語の一編一編が遠い時代の伝承に結びついているのが大半であるという特色を『遠野物語』のリアリティーとしてとらえることが可能である。

遠野郷が湖水であつた頃、鮭に乗つてこの土地に入ってきたとも語られている。鮭の帰趨本能は水脈において働く。人はその鮭を頼りに定着していくたはずである。

遠野の町に宮といふ家がある。土地で最も古い家だと伝へられて居る。此家の元祖は今の気仙口を越えて、鮭に乗つて入つて来たさうだが、其当時はまだ遠野郷は一円に広い湖水であつたといふ。その鮭に乗つて來た

人は、今の物見山の岡続き、鷺崎といふ山端に住んで居たと聽いて居る。其頃はこの鷺崎に二戸愛宕山に一戸、其他若干の穴居の人やまばたが居たばかりであつたとも謂つて居る。（『遠野物語拾遺』一三八）川を遡つてきた始祖を持つ遠野郷は水の都である。そこに物語の水脈がある。幾多の水源にたどり着いてみようと思う。

第一節 「沼神の手紙」の系譜

幸福の手紙というものをご存じの向きもあるだろうが、幸福の手紙を受け取つた者は律儀に誰かに書かないと不幸になるというものだ。手紙というものの呪術性を利用した遊びにちがいないのだが、やたらこんな類の手紙が舞い込んだ場合、貰つたほうとすればたいへん迷惑な話である。逆に世間では便りのないのはよい便り、などと言つて梨のつぶてを容認する面もあるのである。それだけ人が手紙に託す心情の強さを反映させているといえるだろう。ある男が川のほとりで若い女から一通の手紙を預かり、沼に住む女のところに届けることになる。途中で会つた六部（巡礼）がそれを開いて読み、大きな災厄を招くことになるからといって書き換えてくれる。その手紙を沼の女のもとに届け、かえつて幸いを得るという水神あるいは沼神の文づかいの例話が『遠野物語』の〔二十七〕に收められている。対比する必要上、全文を掲げることにする。

早池峰より出でて東北の方宮古の海に流れ入る川を閉伊川へいがわといふ。その流域はすなわち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今は池の端いけはたといふ家の先代の主人、宮古に行きての帰るさ、この川の原台はらだいの淵ふちというあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を托す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩けば宛名あてな

の人が来べしとなり。この人請け合いはしたれども路々心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部ろくぶに行き逢えり。この手紙を開きよみて曰く、これを持ち行かば汝の身に大なる災あるべし。書き換えて取らすべしとて更に別の手紙を与えたり。これを持ちて沼に行き教えるごとく手を叩きしに、果して若き女いでて手紙を受け取り、その礼なりとてきわめて小さき石臼いしうすをくれたり。米を一粒入れて回せば下より黄金出づ。この宝物の力にてその家やや富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度にたくさんの中の米をつかみ入れしかば、石臼はしきりに自ら回りて、ついには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、小さき窪くぼみの中に溜りてありし中へ滑り入りて見えずなりたり。その水溜りはのちに小さき池になりて、今も家のかたわら旁わきにあり。家の名を池の端といふもその為なりという。（『遠野物語』二十七）

柳田国男はこの逸話のあとに「この話に似たる物語西洋にもあり、遇合にや」と記すのだが、多分、ノールウェイの「海の水はなぜからいか？」（原題は「海の底でまわる挽臼」）という民話を意識していたにちがいない。アスピヨルンセンは親友のモオの協力を得て、一八四二年に『ノールウェイの民話』を刊行し、ヨーロッパで話題になつた。一八五九年にはサー・ジョージ・ダセントによつて英語に翻訳された。一八四五五年、アスピヨルンセン独りによる『山靈物語と伝説』を刊行、さらに一八五二年と七一年に再びモオと共に著で新しいものを集めてノールウェイ民話を世界に紹介した。「海の水はなぜからいか？」はアスピヨルンセン編の『太陽の東月の西』で読むことができる。佐々木喜善は「黄金の挽臼」（『旅と伝説』昭和四年一月）のなかでアルビヨルンセンのことに触れている。詳しくは紹介していないが、東北地方の巨大ドルメンと対比しながら述べている。柳田が「この話に似たる」というのはそのことであろう。

このアスピルンセンの伝える西洋の石臼の物語は「沼神の手紙」を欠いているが、世界的普遍性ということでも注目できるので概略を紹介しておきたい。

金持ちの兄さんと貧乏な弟がいた。クリスマスの晩、貧乏な弟の家にはひとりきれの肉もひとかけらのパンもなかつたので、弟は仕方なく兄さんの家に食べ物をわけて欲しいと頼みに行つた。

いやな顔をして言つた。「おまえが、おれの言うとおりにするなら、ベーコンの片身をひとかたまり、まるごとやつてもいいよ」

弟はなんでも言われたとおりにすると約束した。

兄さんは命じた。「さあ、このベーコンをやるから、さつさと、地獄に行つてしまえ」

弟は「約束したからには、言うとおりにしましよう」とベーコンを持って出かけた。

一日歩きつづきて日暮れ方、明るい光がぎらぎらとかがやいているところにたどり着いた。ここが地獄かもしけないと弟は思った。あたりを見渡すと、真っ白な長いあご鬚をはやした年とつたおじいさんが薪小屋でクリスマスの薪を切つてているのが見えた。

弟が「地獄に行こうと思っている」というと、ここが地獄だとおじいさんは答え、こう言つた。「なかに入るとみんながそのベーコンを買いたがるだろう。地獄では肉が少ないんでね。だが、ドアのうしろにおいてある挽白をよこすまでは、売つたりしてはだめだよ。おまえがまた、でてきたら、その挽白の使い方を教えてやろう。大変な挽白で、なんでも引き出してくれるんだ」

貧乏な弟は親切な忠告にお礼を言つて地獄の扉を叩いた。中に入つて行くと、おじいさんの言つたとおりで、大

きな悪魔や小悪魔が弟を取り囲み、ベーコンをせがんだ。

「本当は私の家内と二人でクリスマス・イヴに食べる御馳走なんだが、そんなにほしがるならあげてもいいよ。けれども、そのかわりに向こうのドアのうしろに置いてある挽臼を貰いたいな」と弟はおじいさんから言われたとおりに言った。

悪魔はなかなか応じてくれようとはしなかつたが、弟も一步も引き下がらないので、悪魔のほうが根負けして譲つてくれた。

弟は念願の挽臼を手に入れて地上に出てきて、早速、おじいさんに挽臼の使い方を教わった。家に帰り着いたときは十二時を回っていた。おかみさんはあまり遅いので心配して待っていたと怒った。

弟は挽臼に向かってクリスマスのお祝いにいるものを何もかも言って出してもらつた。びっくりしたおかみさんはどこで手に入れたか聞き出そうとしたが弟は絶対に教えなかつた。

三日目には友達を招いて大宴会をひらいた。金持ちの兄さんは弟がたちまち金持ちになつてしまつたので大変、不機嫌になつた。兄さんがその秘密を聞き出そうとすると、弟は最初は「ドアのうしろさ」などとごまかしていたが、少し酔っぱらつたらつい口をすべらしてしまつた。そして兄はいろいろ言いくるめた挙げ句、千五百クローネを払つて挽臼を自分のものにしてしまつた。それでも弟は収穫のときまで待つてもらつた。しかし、臼の使い方を教えて手渡したのである。

兄さんはおかみさんと草刈人とを畑に出してから、昼ごはんの時間になると、こつそりと挽臼に向かい、「ニシンとおかゆを挽き出せ。上手に、はやく!」と命じた。

すると出てくるわ出てくるわニシンとおかゆばかり。容器がなくなつてもまだまだ出てくる。兄さんが溺れるほど出てきた。やがてそれは滝のように外へと流れ始めた。

畑にいたおかみさんは昼ごはんの知らせをまだかまだかと待っていた。あまりにも遅いので家のほうへ向かつて歩きはじめたとたんニシンとおかゆが洪水のようになつて押し寄せてきた。その先頭を兄さんが走つてくるのだつた。

兄さんは弟の家に駆け込み、挽臼を引き取つてくれと頼んだ。もう千五百クローネ払つたら引き取るといつて持ち帰つたのである。

弟は兄さんの家より立派な百姓家を建て、挽臼にたくさんの金を引き出させ、屋根を金の瓦でふいた。海岸の近くにあつたので海のはるか彼方からも見え、船でそばを通りかかる人の名物となり、誰も彼も上陸しては挽臼を見物して帰るのであつた。

あるとき一人の船長がやつてきて、塩を引き出せるかとたずねるので弟は出来ると答えた。すると、船長はどんなに高くてもそれを手に入れたいと申し出た。塩を積んで長い航海をしなくともすむと考えたからである。弟はなかなかうんと言わなかつたが、何万クローネかを払うことで決着がついた。船長は気でも変わつたら大変とばかりに使い方を聞くのも忘れて船に持ち帰つた。

船長は挽臼を甲板に運び出し言つた。「塩を挽き出せ。上手に、はやく！」

挽臼は塩を挽きだし始めた。塩が水の流れるような勢いでどんどん出てきた。やがて塩が船いっぱいになつてきた。それでも挽臼は休むことなく塩を出しつづけ、ついに船が沈んでしまつた。

その挽臼はいまも海の底にあって塩を挽き出しておる、それで海の水が塩からいのだという。

こんな粗筋の話である。金の瓦で屋根をふく話はどうみても黄金産出の背景しか考えられない。挽臼は金の粒なり、塊を挽き出したのであって、それがひいては裕福の源となり、食べ物や調度品を調達できるお金となつたのである。

この話とほとんど同じ話型がスウェーデン（「塩ひき臼」）にある。シャープさにおいて少し見劣りするが、類話として記しておく。

グリム童話の「おいしいおかゆ」（一一六）は臼ではなく、なんでも出す鍋の物語として伝わる。貧乏な信心深い少女が食べるものがなくなつて、森に行くと、見たことのないおばあさんに会つてお鍋を一つもらう話から始まる。あとはアスピヨルンセンの「海の水はなぜからいか？」で起こつたのと同じく、少女の留守におかゆを出させた母親がおかゆの洪水攻めに会う。そこにようやく帰ってきた少女が「おなべや、おしまい！」と言ふと、やつと収まつたのである。こちらは話が転々としているうち一部だけ伝わり、変形されたものと見える。

日本ではクリスマスではなく、大歳の夜に設定され、ほぼ同じ粗筋のものがかなり伝わつてゐる。特に『遠野物語』の〔二七〕とほとんど同じ地区の上閉伊郡土淵村で採録された「塩吹臼」（関敬吾『日本昔話集成 第二部の2』）は「沼神の手紙」の部分が欠落しているものの、あとはかなり酷似しているのに驚くほどだ。佐々木喜善の『老嫗夜譚』の「塩吹臼」（八九番）とほとんど同じ話になつてゐるが、こちらは岩手県山田町の港に通じていた話となつてゐる。語つた人が違つてゐるかも知れないが、ほとんど同じ語りになつてゐるのが不思議なほどだ。聴耳の人たちは相当耳がよかつたのかもしれない。山田港にはロシアの船がよく出入りしていたというから「塩吹臼」は船員

の伝承の領域に入っていたのかもしれない。

あるところに兄弟があつた。兄は小馬鹿で生意氣だつたが、弟はなかなかの利口者であつた。冬になつて思うよう仕事もなく困つていた。年越しの晩になつて弟は兄貴に米一升を借りに行くことにした。兄貴は女房をもらつてなんたる体たらくだと怒り、よそに行つてくれと追い返した。

弟は返す言葉もなく、山を越えていくと、枯柴を集めている一人の白髪の老翁に出会つた。御歳神様に上げる米もなく、実は当てもなく歩いていると語ると、老翁は小さな饅頭をくれた。

「この饅頭を持つてあそこの森の神様の御堂の後ろに行くと、穴があつて、そこに小さな小人がいて、お前に饅頭をくれと言うから、金でもなく物でもなく、ただ石臼と取り替えてくれるならば遣つてもいいと言え。小人たちは饅頭をひどく欲しがるから」と言つた。

弟は老翁の言うとおりに御堂へ行つてみると、その後ろに穴があつたので入つていった。大勢の小人たちががやがや騒いでいて、饅頭を見たとたん、誰も彼もそれを欲しがつた。案の上、黄金を弟の前に並べて出した。弟は老翁にたしなめられていたので黄金を拒んだ。弟は「石の挽臼となら取り替えてもいい」と言つた。小人どもは困つたなという様子を見せた。二つとない宝物だと言いながらしぶしぶ取り替えようと言い、石の挽臼を弟に渡した。穴から出て、老翁のところに行くと、右に回せば思うものが出て、左に回せば出が止まると教えてくれた。

家に帰ると待ちくたびれた女房がどこをほつき歩いていたのかと責めたが、まあいいからむしろを出せと言つて挽臼に向かつて「米出ろ米出ろ」と唱えた。米がぞくぞく出て、一斗も二斗も出た。つぎに「鮭よ出ろ」と唱えると、塩鮭が一本も三本も出た。第一家は無事、年越しをしたのである。

元旦を迎えた弟はもう傍屋かたやなどいやだと思ったので、家を出してもらい、ついで土蔵、長屋、廐とつぎつぎと出した。そして近所の人、親戚縁者を呼んで、祝事を始めた。

弟は駆けつけてくれた人たちにお土産にお菓子でもやろうというので挽臼に向かつて「菓子出ろ菓子出ろ」と唱えた。それを兄貴がこつそり見ていたのである。それで兄貴はみんなが帰り、弟夫妻も寝静まつたころを見計らつて忍び込み、挽臼を盗み出した。海辺までやつてくると、船がつないので、これ幸いと船に挽臼を載せて船を漕ぎ出した。その日は甘い餅や甘い菓子ばかり食べたので塩つ気が欲しくなり、「さあ塩出ろ塩出ろ」と唱えた。挽臼はぐるぐる回り、塩は洪水のように溢れた。あつという間に兄は船もろとも海の底に沈んでしまった。

その挽臼を止める方法を聞いていなかつたものだから今でも海底でぐるぐる回つて塩を挽き出しており、そのため海は塩辛いのだと言う。

スウェーデン版とは同工異曲といつていいほど類似した話である。ここにも小人が黄金を真先に出しているように挽臼と黄金は密接な関係にあることがわかる。金属生産とのかかわりと見ておく必要があるだろう。

「右に回せば」出て、「左に回せば」止まるというのは臼の原理にかなつてゐる。つまり時計方向（右回し）にやれば粉が出てくるが、反時計方向（左回し）にやれば粉は出てこない理屈になる。それは臼の目というものが物理的にそうなつてゐるからである。ただ、手回しの場合は反時計方向が普通だという。

ところで、生活用の石臼の時代の特定は困難ではないようだが、金山で使われたものは容易には特定できないものが多いう。

さて、中国の六朝時代の見聞の記録をもとにした『搜神記』の話題に移ろう。似ているといつてもこの場合は手紙を託すところが一致するという点である。〔二七〕と同じようにその語り口を眺めてみよう。

胡母班は字を季友といつて、泰山郡（山東省）の人である。あるとき泰山のふもとまで行つたところ、木のあいだから不意に赤い着物をつけた足軽が現われて、班に声をかけた。

「泰山府君のお召しでございます」

班はびっくりして、どぎまぎしたまま返事もできずにいると、また一人の足軽が出て来て声をかける。そこであとについて行つたが、数十歩進むと、しばらくのあいだ目をつむついてほしいと言う。そしてまもなく目をあげたときは、たいそうおごそかな構えの宮殿が見えた。

班はそれから中にはいって行き、泰山府君に拝謁した。すると府君は食事を出してもてなし、「貴殿にお目にかかりたかったのはほかでもない、娘むこに手紙をことづけたいと思つたからじゃ」という。班が、

「お嬢さまはどちらにおられますので」

とたずねると、

「娘は河伯の嫁となつておる」

「それではお手紙をいただきましようが、いったいどのようにしてとどけたらよろしいのでございましょうか」「黄河の川中まで漕ぎ出し、そこで舟ばたを叩きながら『女中』と呼べば、手紙を取りに出る者があるはずじゃ」そこで班は退出した。さつきの足軽がまた目をつむらせ、しばらくたつたと思うと、もとの道へ出ていた。

それから西の方へ出かけ、府君から言われたとおりにして女中を呼ぶと、まもなく一人の女中が川の中から出て来て、手紙を受け取るなり沈んで行つた。そしてしばらくたつとまた姿を現わし、

「河伯さまがちとお目にかかりたいとのことでござります」

と伝えたうえで、これも日をつむつてくれと言う。そして河伯に拝謁したのであつた。

すると、河伯は大宴会を開いてもてなし、ていねいに言葉をかけてくれた。帰ろうとすると、「あなたにはるばる手紙をとどけていただき、ありがとうございますが、何もさしあげるものがありませんので」と言つてから近侍の者に、

「わしの青糸の靴を持つて参れ」

と命じ、それを贈物にしてくれた。班が退出してから日をつむると、いつのまにか舟に帰つていたのであつた。

(「74 泰山府君」、『搜神記』)

このあとにも話はつづくのだが、河伯（黄河の神）と手紙という文脈からそれたものとなつてるので省くことにする。ここでは贈り物は石臼ではなくて青糸の靴である。

唐代の『酉陽雜俎』には同じく六朝時代の南北朝の宋王朝の創始者・裕が登場する類話が収録されているので紹介しておく。木の葉を投げ込むと人が出てきて、水中の宮殿に招かれるという竜宮伝説のヴァリアントとなつている。

平原県の西、十里に、むかし杜林があつた。

南燕の太上〔四〇五一四一〇年〕のとき、郡敬伯じょうという者が、長白山に住んでいた。ある人が敬伯に、一

函の書をよこした。その文面は、

「わたしは、呉江の使だ。命令によつて済伯に通信をするので、いま、長白を通過しなければならない。どうか、貴下がこのことを伝達していただきたい」

というのである。

それで、ただ、杜林のなかで樹の葉を取つて水中に投げこめば、人が出でくるはずだと敬伯に教えていた。敬伯が、そのとおりにすると、果して、人が案内して入らせようとした。敬伯は、水におじ気を示した。その人は、敬伯に目を閉じさせた。水中に入つたらしい。ところが、ひろびろとして、宏壯で華麗な宮殿があつた。年のころ、八、九十ばかりの老人が、水精〔水晶〕の長椅子に坐していた。函を開け、書状を開いてから、こういった。

「裕が台頭し、超は滅亡する」

侍衛の者は、みな、まんまるな眼をして 甲冑かっちゅうをつけていた。

侍衛の者は、挨拶をのべて退出した。一口かりの刀を敬伯に贈り、

「では、お氣をつけて、ただ、この刀を所持していれば、水厄はよけられます」

といつた。

敬伯は、出てから、杜林にもどつたが、衣裳は、全然、ぬれていなかつた。

果して、その年、宋の武帝が、燕を滅ぼした。

敬伯は、両河の間に三年、住んでいた。ある夜、突然、洪水がおこり、全村が水没した。敬伯だけは、長椅

子に坐っていた。明け方になつて岸についた。敬伯がおりてこれを見ると、大きな龜かめであつた。

敬伯が死んで、刀もなくなつたのである。

杜林の下に河伯の家があると、世俗に伝えられている。（『西陽雜俎』卷十四、五四五）

同じく唐代の李朝威という著述者によつて龍宮伝説を下敷きにした「柳毅の物語」が伝えられているのでこちらも紹介しておく。

柳毅という書生が官吏登用採用試験に失敗して湘水のほとりに帰ろうとするとき、同郷の人々に別れの挨拶に寄ろうとすると、途中で羊を飼つてゐる一人の女と出会つた。柳毅は不思議に思つてよく見ると、ことのほか美しいが、花のかんばせには愁いのかげがさし、衣の袖にも輝きがなく、しつと耳をすまして立ち尽くす姿は、何かを待ち受けているように見えた。

柳毅は「あなたはなんでこんな卑しい仕事をしているのかね」とたずねた。すると、女は恥ずかしいことですが、と言いながら包みかくさず話すのでは非聞いてほしいと言つた。「わたくしは洞庭湖の竜王の娘でございます。両親の申しつけで、經川の神の次男に嫁ぎましたが、夫は道楽息子でございまして、小間使いどもに目がくらみ、日ごとにわたくしをつれなくあつかうのです。舅姑に訴えてはみましたが、どちらもわが子可愛さに、夫をいましめてはくれませぬ。あまり何度も訴えましたために、こんどは舅姑ともそりが合わなくなり、二人してわたくしをいじめたあげく、このありさまとなつたのでござります」と涙ながらに述べたのである。

そして、さらに手紙をことづけしたいので洞庭湖に寄つてもらえないかと言う。

柳毅はなんの拒む理由もないから引き受けてもよいが、洞庭湖が水の底だとすれば自分などの任ではないのでは

ないかとためらう。

すると、女は洞庭湖とこの世の都とはなにも違ひないと言いながら、手紙をお願いしたいと申し出た。

「洞庭湖の南の岸に、橘の大木があります。土地の人は社橘しゃきつと呼んでおります。あなたはその帶をお解きになり、ほかのものをおしめになつたうえで、木を三度お叩きなさいませ。返事をする者があるはずです。それについていらつしやれば、なんの障害もないことでございましょう。どうか手紙をおわたし下さつたうえに、いま申しましたわたくしの胸のうちまでもお伝えいただきますように。くれぐれもお約束を守つてくださいませよ」

このあと柳毅は友人に別れを告げ、やがてたどり着いた洞庭湖の南の岸の社橘の大木を三度叩くと、波の間から武士があらわれ、水を開いて柳毅を竜宮へ案内した。しばらく待つうちに竜宮の王である洞庭が現れた。柳毅が一部始終を話し手紙を渡すと、それを読んだ王は涙にむせび泣くのだった。大奥にもその話は伝えられた。そのとき雨を司る竜一族の大暴れ者の錢塘せんとうが聞きつけてしまい、蟄居ちつきょの身ながら竜宮を飛び出して經川を逆襲したのである。

そればかりか洞庭王の愛娘を取り返してきて、柳毅の嫁に押しつけようとすると、さすがの柳毅も道理に合わぬ話に立腹してしまう。しかし、そこはそのまま收まり、柳毅はたくさん珍宝を頂戴して帰り、たいへんな金持ちになつた。その後、妻を二度も迎えながらつぎつぎと亡くなり、家を金陵（今の南京）に移した。そこで持ち込まれた范陽（河北省）の盧氏の娘を娶つた。ところが、その女は実は手紙を託した竜宮の洞庭の愛娘であることがわかる。二人の間には子供も生まれ、南海（広東省）の方に移り、豪勢な生活を送つた。竜の寿命は一萬年ということで、柳毅もその恩恵にあずかり、水の中、陸の上、どこでも自在に往復できる力も授かつた。何年たつても容貌が衰えないのを不思議がられた。

そんなとき天子が神仙の道術を心得た人をさがしていると知った柳毅はこころ落ち着かなくなり、妻と一緒に洞庭湖に帰ることとした。それから十年ほど消息を聞かなくなつた。

それからしばらくして柳毅の従兄弟の薛嘏が左遷されて東南の地方に赴任することになり、その途中、洞庭湖を通りかかった。突然、大きな山が現れて、船に近づいてきた。

そしてその山から立派な船がやつてきてその中の一人が「柳さまのお越しです」と言つた。柳毅の語る言葉はますます奥深くなつており、顔だちもますます若くなつていた。それに比して従兄弟は白髪になつていた。柳毅は早速、神仙の丸薬を五十粒出して嘏に渡した。「この薬は一粒で一年の寿命をのばすことができる。薬がなくなつたらまたおいで。いつまでも人間界に住んで、われから苦の種を背負いこむのではないぞ」と語つた。

それから後は柳毅も消息を絶ち、従兄弟も五十年近くたつたころ行方が知れなくなつたという。

末尾に柳毅が人間（裸虫）の誠意が竜（鱗虫）に通じたとし、従兄弟の境地もそのそばまで接近したと述べているところから推測すると、作者は人間の誠意や境地の高さを求める精神を説きたかったようにみえる。日本における『竹取物語』に描かれる神仙思想には人間界と月の都をしつらえて俗界と淨土を対比させているわけだが、「柳毅伝」の人間界と竜宮の対比ときわめて似ている。柳毅が消息を絶つ場面はかぐや姫が自在に姿をくらますことができると似ている。中国湖南省長沙に発掘された竜と月をあしらつた画像は人間界から月を結ぶ媒介として竜が存在することをしめす。『竹取物語』の五つの難題は日本の国にはない珍宝ばかり。竜の頸の玉となると、なにをおいても竜宮を目指さなければならぬことになるだろう。竜宮の竜一族は雨・雪・霰・雹を自在にあやつる雷を司る。『竹取物語』には「龍は鳴る神の類にこそあれ」と書かれており、古来、落雷することをタツ（天から降る）

の意に解していたのである。夕立の夕チも同様の意味を持つてゐる。落雷したところに注連縄をして竹を立てる風習があつた。雷が竹を伝つて天に昇るということが信じられていたのである。かぐや姫もまた竜にのつて天に昇つた竜の一族なのかもしれない。穢土から浄土へと、そこは月の都であつて竜宮と一体なのだろう。月の満ち欠けのごとく変化、自在に姿を変えられるのだから。

竹と雷の結びつきについては柳田国男がつぎのように述べている。

たとへば和歌山県の海岸地帯など、田畠に落雷のあつた場合に、其周囲に繩張をしないと、その耕地全体の作物が枯れてしまふと謂つて急いでさうする。関東平野の東京からごく近い処でも、最近はもう罷めたかしらぬが、汽車で通つてみると植田のまん中に、笹竹を四本立て、注連を張つたものがそちことに見られ、是がどうやら稻妻の、又はいわゆる雷様の落ちた場所らしかつた。（中略）是と考へ合せて見てよいことは、田植時に樹の枝又は竹の竿を、田の中に立て、置く各地の風習である。式は今日あまりにも簡単なものになつて居るやうだが、本来は是が又田神祭場の標本であつたかと思ふ。この事は別に「苗忌竹の話」といふのを書いたからそれに譲つて爰にはざつと一通りの事しか述べない。関東北部は一帯に雷の多い地方で、此竹を田畠に立て、置かないといふ、雷様が落ちて暴れまはつて困るといひ、此竹をさへ立て、置けばそれに伝はつて、速かに天に還つて行くから害が無いなど、謂つて居るのは、幾分か前に掲げた紀州の話と似て居る。（柳田国男「御刀代田考」

一〇）

ちょっと脱線したが、竜宮伝説を通して、あるいはかぐや姫を描くことによつて人間の求める気高さが表出されていることがわかる。『搜神記』中の河伯は水神であり、『西陽雜俎』中の挿話も洪水が背景に描かれているところ

ろを見ると、水神の竜がからんでいることがわかり、まんざら脱線ともいえないものである。

さて、日本において沼神の手紙の系譜をたずねるとすると、『今昔物語』にたどりつく。記憶の源はこの中の本朝世俗部に消息を持つ。紀遠助という者が勢田の橋上の女から小箱を託される話が収められている。手紙ではないが筋はほとんど同じといつてよい。

人数た有りける中に、孝範、此の遠助を仕ひ付けて、東三条殿の長宿直に召し上らせたりけるが、其の宿直畢てにければ、暇取らせて返し遣りければ、美濃へ下りけるに、勢田橋を渡るに、橋の上に女の裾取りたるが立てりければ、遠助恠しと見て過ぐる程に、女の云はく、「彼は何ち御する人ぞ」と。然れば、遠助馬より下りて、「美濃へ罷る人なり」と答ふ。女、「事付申さむと思ふは、聞き給してむや」と云ひければ、遠助、「申し侍りなむ」と答ふ。女、「糸喜しく宣ひたり」と云ひて、懷より小さき箱の、絹を以て裹みたるを引き出して、「此の箱、方県郡の唐郷の段橋の許に持て御したらば、橋の西の爪に女房御せむとすらむ。其の女房に此れ奉り給へ」と云へば、遠助、気六借しく思えて、「由無き事請をしてける」と思へども、女の様の氣怖しく思えければ、辞び難くて、箱を受け取りて、遠助が云はく、「其の橋の許に御すらむ女房をば誰とか聞ゆる。何くに御する人ぞ。若し御し会はずは、何くをか尋ね奉るべき。亦此れをば、誰が奉り給ふとか申すべき」と。女の云はく、「只其の橋の許に御したらば、此れを受け取りに其の女房出で来なむ。よに違ふ事侍らじ。待ち給ふらむぞ。但し、穴賢、努々此の箱開けて見給ふな」と、此様に云ひ立てりけるを、此の遠助が共なる從者共は、女有りとも見えず、「只我が主は馬より下りて、由無くて立ちけるを」と見て恠しご思ひけるに、遠助、箱を受け取りつれば、女は返りぬ。（『今昔物語』本朝世俗部、卷第二十七の第二十一）

ところが、このあと、遠助が使いを忘れたため、遠助の妻が箱を見つけ、誰か女にやろうと思つて京都よりわざわざ買つてきたものにちがいないと勘違いして箱を開けてしまつた。箱の中には人の目をくぐり抜いたものあまたと、男のまらが入つていた。約束をたがえた遠助はほどなく命を落とす羽目になる。こちらは「見るな」のタブーを犯したことによる破綻である。最後に女房が嫉妬にかられて箱の中を見てしまうのは、佐々木の採集した「黄金の臼」における女房の欲深さが破滅を招くのに類似している。

「見てはならぬ箱」といえばパンドラの箱があり、浦島伝説の箱が思い出される。やはり箱のほうが秘密めいでいて物語の興趣をそそる。

第二節 「沼神の手紙」「竜宮童子」の中の臼と製鉄族

米一粒入れれば黄金が出る石臼の話は佐々木喜善の『聴耳草紙』の「九番 黄金の臼」にも採用されている。佐々木は他にも類話がある述べている。臼は打出の小槌に比定される。臼は単なる生活具としてではなく、神聖なものとして道具以上の扱いをされてきた経緯がある。桜井徳太郎が「さらにこれらの例にもまして大切なことは、年越の晩に臼を床の間に据え、それに餅を供えたり、またこれを祭壇として歳神様を迎えるという地方のあることである。これは、つまり臼を神様が降臨する神座として使用する何よりの証拠である」（『昔話の民俗学』）と述べる消息に通じる話である。

佐々木の挙げている例話（九番 黄金の臼）においても孫四郎という男が挽臼を大事に神棚に上げて沼神が命じたとおりに一日に一粒の米を挽くことを守り、長者になつていった。それを見ていた妻は大椀にいっぱいの米をいつ

べんに入れて挽こうとした。ところが臼は神棚からころげて水溜まりに入つてしまつて見えなくなる。水に始まり、水に終わる物語である。

臼を基調としたものといえば先述した「海の水はなぜからいか?」や「塩吹臼」があるが、ここでは徳島県の伝承を紹介しておく。

ある所に兄弟があつて、兄は情深く氣立てがよかつたが、弟は欲深の博奕打であつた。

飢饉のつづいた年、兄は貯えを段々と人々に施して貧乏になつてしまつた。或る日、食べものもなくなつて困つていると白い髭の生えた爺がやつて来て、今まで村の衆のためになる事をしてくれたから、よいものを持つて来たといつて、何でも出る石臼を兄に渡したまま行つてしまつた。兄が米出ろ、金出ろと言つて回すと、米や金が出るので、またそれを貧しい人に施してやつた。欲深い弟は兄の宝の臼の話を聞いて手に入れたいといふので、ある日、兄を誘つて石臼を持たせて一緒に舟にのつて海へ漕ぎ出し、船の中で兄を殺してしまつた。そして弟は家に塩がなかつたので、塩出ろ塩出ろと臼を挽きはじめると、塩が舟いっぱいになつたが止め方を知らないので、どうしても止まらない。とうとう石臼といつしょに海の中に沈んでしまつた。

海の水の辛いのは、今でもこの臼が回つてゐるからである。(徳島県美馬郡) (日本放送協会編『日本昔話名彙』)

やはり打出の小槌につながる話である。臼の他には独楽、尽きぬ財布、せにさし錢縕、子犬、黄金の馬などが同じ役割を果たす。

遠野郷にこの臼で米をついて黄金を得て長者になるといった類話が多いのはこの土地が製鉄の民によつて支えら

れていた背景がかわっている。十二世紀には奥州平泉を中心とする藤原文化が栄えた背景を考えると、水神と黄金神話との結びつきはきわめて明快な道筋である。

白ではなくて臍から金の小粒を出す童（ワラシ）の話が同じ岩手県の江刺郡に伝わる。こちらは水辺の伝承もあるが、ヒヨットコ起源を伝える山の話を引用しておく。金を生む白と同じ類話としてみてよい。竈神の由来譚ということにもなる。題して「ひよつとこの始まり」。

或る所に爺と婆とがあつた。爺は山に柴刈りに往つて、大きな穴を一つ見付けた。こんな穴には悪い物が住むものだ。塞いでしまつた方がよいと思って、一束の柴を其の穴の口に押込んだ、さうすると柴は穴の栓にはならず、するすると穴の中に入つて行つた。また一束押し込んだが其れも其の通りで、其れからもう一束、もう一束と思ふうちに、三月が程の間に刈り溜めた柴を悉く穴へ入れてしまつた。

其の時、穴の中から美しい女が出て来て、沢山柴を貰つた礼を言ひ、一度穴の中に来て呉れと言ふ。あまり勧められるので、爺はつい入つて見ると、中には目の覚めるやうな立派な家があり、其の家の側には爺が三月程もかゝつて刈つた柴がちゃんと積み重ねであつた。

美しい女にこちらに入れと言はれて、爺は家の中に入ると立派な座敷があり、そこには立派な白鬚の翁が居て此所でも柴の札を言はれた。そして種々と御馳走になつて還る時、これをしるしに遣るから連れて往けとはされたのが一人の童わらしであつた。其れは何とも言へぬ見つとも無い顔の、臍ばかりいじくつて居る子で、爺も呆れたが、是非呉れると言はれるのでたうたう連れて還つて家に置いた。

その童わらしは、爺の家に来ても、あまり臍ばかりいじくつてばかり居るので、爺は或る日火箸でちよいと突い

て見ると、其の臍からぶつりと金の小粒が出た。其れからは一日に三度ず、出て、爺の家は忽ち富貴長者となつた。ところが婆は慾張りの女で、もつと多く金を出し度と思つて、爺の留守に、火箸を持つて童の臍をぐんと突いた。すると金は出ないで童は死んでしまつた。

爺は外から戻つて、これを悲しんで居ると、夢に童が出て来て、泣くな爺様、俺の顔に似た面を作つて毎日よく眼にかかる其所の竈前の柱に懸けて置け。さうすれば家が富み栄えると教へて呉れた。此の童の名前はヒヨウトクと謂つた。其れ故に此の土地の村々でと今日迄、醜いヒヨウトクの面を木や粘土で造つて、竈前の
釜男^{かまおとこ}と云ふ柱に懸けて置く。所によつてはまた此れを火男とも竈^{ひおとこ}仏とも呼んで居る。（「ひよつとこの始まり」、『江刺郡昔話』）

江刺郡にはこの爺様と同じく柴を一束一束と投げ込む類話があるが、こんどは山の穴ではなく、淵の渦巻きの中に投げ込む話である。美しい女が出てきて礼を言うのも同じだが、座敷に招かれて翁に出会い、一人の醜い童（ワラシ）を貰つて帰るのも同じ。この童の名前はウントク、誰も気付かぬ奥のほうに置けば、よい運を授けるという。ヒヨウトクと同じ働きをするのだが、金ではなくて錢をもたらしたというふうになつてゐる。こちらの婆さんは筹でうんと撲つて泣かせて、追放してしまう。ついに爺様は元どおりの暮らしになつてしまつたという。

山の穴と渦巻きの二つは同じ水底のことだと柳田国男は言う。その奥に行けば、座敷があるというのは竜宮に脈絡を持つ。柳田がつぎのように述べるとおりだらう。

それから此序に今一つ言つて置きたいことは、私が最初に聴いた方の江刺郡の昔話で、柴を投込んだのは淵の渦巻きで無く、山中の穴といふことになつて居るので、何だか水の神との縁は乏しい様にも見えるが、是も

決して別口では無かつたといふことである。人のよくいふ椀貸し伝説を始とし、岩屋に水の神の信仰の移つて居る例は他にある。谷の奥などの岩穴にも水の流れ出すものがあれば、人は其底が龍宮に通ふと言ひ伝へて居ることがあつた。さうして土地の表に顯はれた流よりも、却つて此の如き地下泉の露頭を、神秘なものの様に想像し、之を水の神の神座と繋がるかの如く、考へる傾向があつたらしいのである。此点は淵の渦巻のよく物を吸ひ込む所から、之を水底に入つて行く門口の如く看做したのと、或は根元に於て一つであつたらうと思ふのである。（柳田国男「海神少童」五）

この山の穴が水神と不可分の結び付きを持つてゐることを内藤正敏は「龍宮童子」における川や海に投げ入れるもののこと」とくが柴であり、薪であり、門松、花、年木といった山のものであるとし、山の穴の中に柴を入れたということは、水辺に脈絡があつてのことだと推定しているが、そのとりだと思う。そこで山のものを海に流しそのおりに竈神をもらつた話（岩手県磐井郡東山町）を一例にあげてゐる。

ある海辺の貧しい親子が正月の門松の松を切りに山にはいったが、二人は共に立派な枝ぶりの松をさがして持ち帰り、結局、父親の方の松を立てることになり、息子の切ってきた松を海に流した。すると翌朝、見知らぬ者が訪ねてきて門松の礼を言い、一人は御馳走にまねかれ、帰りにカマド神をもらつて帰つた……。（岩手県）カマド神についての詳細を省きカマド神をもらつて帰るということになつてゐる。

〔二十七〕の遠野の地の周辺には小友町、上郷町、土淵町といった金山を持つ。岩手県内に「沼神の手紙」を伝承するところは全部といつていいほど金山をかかえている。

①下閉伊川郡川井村の「兄弟淵」（佐々木喜善『聴耳草紙』）の背後には甲子村、栗橋村の金山。

②上閉伊郡大槌町の「尽きぬ銭縁」（右同）は手紙を渡したあと、秋田の赤沼というところで朱塗りの盆に山ほどの黄金を盛つたものをもらう話だが、地名は特定できないものの、秋田県もまた金属鉱山をかかえる土地である。大槌町付近には大槌町自身はもちろんのこと、門馬村、田老町、宮古市などがある。

③江刺市福岡村付近の「淵から上がった福神童ウントクの話」（佐々木喜善『江刺郡昔話』）は米里などの金山と近接している。

④岩手県岩手郡雫石村の「上下の河童」（佐々木喜善『聴耳草紙』、関敬吾『日本昔話集成 第二部の2』）のあたりには御明神村、玉山村、築川村、松尾村などの金山をひかえており、雫石は銅山で知られる。

いずれも水神からもらった贈り物を使用することによって金の粒や黄金や小判といった裕福になる条件をかなえていく。金属伝承を十分に伝える事情を物語に包み込んでいる。

金山がなくても銅山などをかかえている土地には「沼神の手紙」伝承は伝わりやすいようだ。いざこが発祥の地か推測するのはむずかしいが、岩手県を中心にして青森、秋田、山形、福島にまんべんなく分布しているからである。

山梨、茨城、奈良、大阪、徳島、長崎、大分、鹿児島などにまでこの伝承は語られているが、文面を読んで助かるといつた事例が多く、水神からの贈り物やその贈り物を使って財宝がもたらされるといつたことが欠けているのに注目してよい。金山や銅山などを背後にかかえているとも限らない。これを見ると、「沼神の手紙」は金山や銅山の周辺に深くかかわった伝承であることが推測できる。鉱山との関係性が希薄になつた分、物語自身が薄弱な内容になつて語られているようだ。

「沼神の手紙」と同工異曲の「竜宮童子」において金を屁る動物が登場するのはたいてい銅や銀の鉱山をかかえ

る四国、九州に多く見られることをかんがみると、黄金、金の粒あるいは金といったものを生み出す源泉には水神と鉱山との密接な関係性を抜きにしては考えられないことをしめす。沼神、竜宮は文字通り水と不可分ということになる。

「竜宮童子」型にあつて水神から童をもらう話体は東北地方に多く分布し、四国、九州では例外もあるが主に犬、猫、馬、鶏などの動物を特色とするので話体は二種あることになる。「沼神の手紙」型では水神からの贈り物は臼、挽臼、石臼の事例が大半である。

童子・動物・臼といつた体裁の違いをみせても金属神の役割という点で一つであることは内藤正敏の「ヒヨウトク譚のヘソに隠された金属伝承」が明らかにしているように金鉱石精錬の臼にその謎が隠されている。『江刺郡昔話』の「ひよつとこの始まり」の童がしきりに臍をいじり、そこから金の粒がひねり出される仕掛けは金鉱石精錬の臼そのものの比喩であつたからである。上玉と下玉を重ねて心棒を軸にして回転させる。上玉の中心には鉱石と水を流すヘソ穴（ヘソともヘソツコとも呼ぶ）があり、上玉と下玉が回転、接触することで金が精錬され、余分の岩石分が外に出る仕組みである。下玉は挽いたあとの受け皿を兼ねている。童が臍をいじるというのは精錬上の「ヘソ穴」を示唆しているのである。

「竜宮童子」型の動物の事例をあげておく。柳田国男が長崎県島原半島の例話として採用したものである。

昔々姉と妹との二人があつて、姉は金持の家に嫁入し、妹は山番の妻になつた。妹は毎日山から薪を負うて町へ売りに出たが、或日どうかして薪が売れぬので、姉の家へ遣るのもいやだと思つて、其薪を海に投込んで帰つて來た。

さういふことが何度か続いたところ、或日いつものやうに薪を海に投げて帰らうとすると、海の中から女が出て来て、龍宮へ来てくれと言つて案内した。その途で「帰りに何か土産を下さると言はれたら、黒猫を所望するがよい」と教へてくれた。何日が龍宮に逗留して後、いざ帰らうとする時に土産を遣らうと言はれたので、予て教へられた通りに黒猫をといふと、是には毎日小豆を五合づつ喰はせなくてはならぬと言つて、その黒猫を下された。家につれて来て五合の小豆を与へると毎日五合づつ黄金を糞する故に、忽ちにして大金持になってしまった。日頃音信もせぬ姉は此事を聞いて、その黒猫を借りに来た。否とも言へぬから貸して遣ると、元来慾の深い姉は大喜びで、小豆を一升づつ食はせて見たが、一升の黄金は糞せずに死んでしまつた。

妹は可愛さうに思つて猫の死骸を貰つて来て、自分の屋敷に丁寧に埋めてやると、後其土から橙だいだいの木が生えて來た。黄金を生んだ猫の死骸から成長した橙の木だから、めでたい物としてそれ以来、正月には其実を飾るやうになつたといふ。（柳田国男「海神少童」三）

橙の木がつけ加わつてゐるが、長崎らしい南方性を持つた話体である。水をもつて精鍊する金はヘソ穴を経由して、最終的にした玉の窪みにたまるわけで、そのどろどろしてゐるところから糞と同じ扱いを受けるのだろう。年越しの晩にとめた醜い大男が籠のそばに山盛りの糞を残していつたのが金の塊であつたとし、その男の似顔を書いて大黒柱にかけて朝晩拝んだのが釜神になつたという話（宮城県遠田郡田尻町大貫）に近いものは東北に特に多い。金属と水神、さらに竈神までが仲間に加わつてくるのである。

黒猫に食わせる小豆というのが精鍊にかけるべき石めいてくる。子犬が贈られ黒猫と同じ立場で黄金を生む話も各地に分布している。「花咲爺」の犬もまた大判小判がざくざく出てくる事例に結びつく。その犬の大半は川から

流れてくる水に縁のある体裁を取るのが特色である。

水神の働きが金属精錬と結びつく岩手県内の「竜宮童子」型は美しい女が登場して竜宮に案内してくれるものがほとんどだが、他の地方では童子が迎えに来る場合も含まれるもの、たいていはいじめた亀や青蛙や魚が恩返しに亀もしくは人が背中に乗せて竜宮に案内することになる。例外的に亀を土産にもらうケースもある。亀が登場し、乙姫との取り合わせとなると、これはいわゆる竜宮乙姫物語の典型となる。

いずれの場合も恩返しの結果は金持ちになることで一緒に、「川に白金が流れる」（鹿児島県薩摩郡上甑島）といったふうな黄金伝説が大半を占める。つまり「沼神の手紙」「竜宮童子」は本来的には水神と金属伝承が密接に結びついた物語であることが判明するのである。その素材の変形や希薄性は水神あるいは金属神との関係の薄さを証明するものと断定してよい。したがって子ども向けの竜宮城の話型のほとんどは竜宮そのものを誇大に扱つたものであつて、帰還後の黄金を屁るといった経緯を省くことになり、欲深婆の存在に目をつむることになる。柴などの山の恵みを川や海や水辺に手向ける素朴な感情をもよく示しえないままに物語ることになつていると指摘できる。本来はその素朴な森羅万象との折り合いのつけ方に古代人は生き甲斐を見出していたはずである。アイヌの人々が今日なお山に入るときは火を焚き、イナウをもつて祈りを捧げ、取ったものは必ず山に捧げるという営みを微塵たりとも崩さない姿勢を思い出すのである。乱獲というのは欲深婆や欲深のもうもの登場人物の遺り口である。「竜宮童子」の話型にはそんな重い思想が託されていたのである。命の大系へのいとおしみが通底していること、自然のリズムといいうものの厳かさといったことを古代人は語り継ぎながら自戒していくことが見えてくる。

人間というもののが深さがためされる鏡の役割を物語は果たしている。童子あるいは大男が登場した場合、醜かっ

たり、めぐさかつたり、みつともなかつたり、ぼろを着て乞食のようであつたりするのだが、これはスサノオが蓑笠姿で旅に出る姿と重なり、それを受け入れるものと拒絶するものとでためされる神話につながっていく、試練の物語である。異人を歓待するか否かの瀬戸際を物語は演出しているのである。これを感受する力は人が長者になつたのを見届けてからやおら動き出す欲深の人間たちには欠落している領域である。

第三節 泉鏡花の作品中の“沼の手紙”

泉鏡花の『高野聖』には異界民俗学によつて観察すべき水源の領域の民俗事情がはたらいている。『照葉狂言』には「お銀小銀」の伝説が敷かれており、『歌行燈』には貴種流離譚が描かれ、『龍潭譚』には神隠しの謎が見え隠れし、民間伝承に脈絡を持つ作品が特色となつてゐる。なかんずく、水脈につながる物語を語り口としている。

この説で取り上げるのは『今昔物語』第二十七第二十一の紀遠助が美濃に向かう途中、勢田の橋に立つ女から頼まれて不思議な小箱を預り、別の橋の女のもとに届け、怪死を遂げる説話にほぼ符合するストーリー展開をした作品が少なからずあることに注目したい。

天満の鉄橋は、瀬多の長橋ではないけれども、美脳へ帰る旅人に、怪しい手箱を託けたり、俵藤太に加勢を頼んだりする人に似たやうに思つたのだね。

由来、橋の上で出会う綺麗な婦は、凡て凄いとしてある。(「南地心中」四)

この文章のすぐ前の章には「浜寺の魚市には、活きた竜宮が顯れる、此の住吉の宝市には、天人の素足が見える」

という一節が見えるが、水底を舞台にした物語が浮かび上がってくる。宝の市は神功皇后が三韓からの貢物をはじめ百貨を民人に頒たれた故事にまつわるもので、わが国の市の最初といふわれもあつて、それにぎわいぶりはさながら龍宮の宝の山を目前にした雰囲気をかもし出していたにちがいなく、いたく鏡花を魅きつけた模様だ。南地から白拍子、市女、稚児らが派手を競い、神事を執り行う。

「南地心中」の主人公お珊瑚は船場の大金持ち丸官に落籍された後、天王寺で猿曳をしていた美少年多一に心魅かれ、引き取つて世話をすると、多一にお美津という許嫁がいることを知つてお美津を招き寄せる。

話の後半に文箱の話がもう一度出てくる。

初阪はつざかは、不思議な物語に伝へたる類の、同じ百里の旅人である。天満の橋を渡る時、ふと何処ともなく立顯ことうかれた、世にも凄いまで美しい婦おんなの手から、一通玉章たまづさを秘めた文箱ふばこを託ことづかつて来て、此こなる池で、嘗て暗示あわてんされた、別な美人たおやめが受取りに出たやうな気がして成らぬ。（同、十五）

その文箱は見てはならぬもの、じつと池の面を見入つてゐるお珊瑚がその小箱を託されてゐる想定になるのだろう。その池に亀が見えたとあつて、龍宮が重なつてくる。しかし、物語は龍宮へと向かうのではなく、ひとしきり「思いかけぬ寂しさ」を感じさせる。住吉大社は水神にゆかりのある神社である。すべて水のお導きか。多一が猿曳きというのも水が縁。お珊瑚は市女姿に装い、多一とお美津は囃子姿で行列に加わる。

そしてお珊瑚は丸官を蹴つて多一とお美津を毒殺し、みずからも果てる。「世にも凄いまで美しい婦」はお珊瑚にはかならず、毒殺の筋書きは彼女が仕組む。禁忌を犯してそれをのぞいたのは誰とは特定できないのだが、多一とお美津が添い遂げる体裁を借りて、秘密の文箱を覗いた報いを受ける結末である。「沼神の手紙」の変容した形でこ

の作品は構成されている。

「沼神の手紙」的な水脈だけでなく、水のイメージがこの物語の伏流水として脈々と流れている。

淀川が描かれる。「此の陽気だから、自然と淀川の水気が立つ、陽炎のやうなものが、ひら／＼と、其が櫓の面へかゝると、何となく燐ほたると美しい幻が添つて、城の名を天下に彩つて居るやうに思はれたつけ。其の花やかな中にも、しかし、長い、濃い、黒髪が潜んで、瀧のやうに動いて居た」（「南地心中」一二）という箇所がまずあって、じつと櫓のあたりを眺めているうち、「四五間前に、上品な絵の具の薄彩色で、佇たたずんで居た、今の、其の美人の姿だがね、……淀川の流れに引かれた、私の目の所為せいなんだらう。すゞと向うに浮いて行つて、遠くの、あの、城の壁の、矢狭間とも思ふ窓から、顔を出して、此方を覗いた。然う見えた。何時の間にか、城の中へ入つて、向直つて。……」（同、二）と劇中劇をしつらえる。そこに見えた姿は「黒雲の下、煙の中で、凄いの、美しいの、と云つて、そりやなかつた」となる。初めて大阪に下つた初阪ものと同伴の男との会話なのだが、この作品の重要な登場人物を暗示していくのである。

つまり鏡花は「淀君をはじめ、夥多あまたの美人の、練衣、紅の袴が寸断々々に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える」（同）と淀君の最期をお珊にオーバーラップさせている。城の中に入つたと描かれる美人は淀君に擬したお珊にはかならない。

淀君が秀吉の側室でありながら秀頼を政権につがせるべくあらゆる手を尽くす。秀吉の死後は徳川家康に頭をさげることも出来ず、ついに淀君と秀頼は自害する。鏡花の物語はそこにつながる。

第四節 川を流れてきた椀もしくはマヨイガ

『遠野物語』には川を流れてきた椀の伝説が二つ収録されている。最初の〔六三〕は明らかに水源に発する物語である。川に沿つて歩いているうちに立派な屋敷にたどり着き、驚いて家にもどるのだが、やがて川を流れてきたお椀を拾つて幸運になるという物語を形づくる。その立派な屋敷は「マヨイガ」と呼ばれ、水中の龍宮に匹敵する存在となるが、いささか趣を異にするもののそれぞれ致福譚の変形版であることに違いはない。「お椀」というものに呪物（フェティッシュ）なもの名残を感じるのだが、浦島太郎であれば「箱」であり、龍宮童子では「童子」「動物」が幸福の媒介をする。〔六四〕のほうはマヨイガらしいところに出くわしたもの恐ろしくなつて引き返すのだが、それを聞いた者が膳椀を持つてくれば長者になれるというのでそれを求めて山奥に入るのだが、むなし帰つてくる。その後、その男が長者になつたという話はついぞ聞かなかつたという。明らかに柳田国男は〔六三〕と〔六四〕を一对の対照的な話型として並べている。

〔六三〕を全文引用しておく。

小国の中浦某といふは村一番の金持なり。今より一三代前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍な
りき。この妻ある日門の前を流るる小さき川に沿ひて路ふきを探りに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く
登りたり。さてふと見れば立派なる黒き門の家あり。いぶか 訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白
の花一面に咲き難多く遊べり。その庭を裏の方へ廻れば、牛小屋ありて牛多くおり、馬舎ありて馬多くおれども、
一向に人はおらず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳椀をあまた取り出したり。奥の
座敷には火鉢ありて鉄瓶の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなれば、もしや山男の家ではない

かと急に恐ろしくなり、駆け出して家に帰りたり。この事を人に語れども実まことと思う者もなかりしが、また或る日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き椀一つ流れてきたり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたらば汚しと人にしかられんかと思い、ケセネギツの中に置きてケセネを量る器となしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経ちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由をば語りぬ。この家はこれより幸運に向い、ついに今の三浦家となれり。遠野にては山中の不思議なる家をマヨイガという。マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の什器家畜じゅうき何にてもあれ持ち出でて来べきものなり。その人に授けんがためにかかる家をば見するなり。女が無慾にて何ものをも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべしといえり。〔六二〕

福をもたらす典型として女を造形しているのではないかと思いたくなるほどだが、柳田はさほど意識しているふうには見えない。しかし、この種の無欲なタイプの人物が福分を運ぶ神のような存在であることをは民俗学の領域のみならず、文学の世界、詩の分野にあっても一様に描かれるものらしいことはつぎのいくつかの事例が教えてくれる。

シェクスピアの『あらし』にコンザーローが「何でも彼かれでも自然が恵んでくれます、人間は汗水垂らして努める必要無し、反乱、窃盜は勿論の事、剣、槍、匕首あいくち、鉄砲、その他、危ない道具はすべて御免を蒙ります、自然の恵みは限り無く、手を加えずして五穀は豊穰、吾が罪無き民草を養うてくれます」（第二幕第一場）ということを唐突だが思い出した。

同じくゴンザーローは「この国におきましては、万事この世とあべこべに事を運びとう存じます、先ず、取引と

名の附くものは一切これを許しませぬ、役人は肩書無し、民に読み書きを教えず、貧富の差は因より、人が人を使ふなど——とんでもない、すべて御法度、契約とか相続とか、領地、田畠、葡萄畠の所有とか——これ、またどんな話、金属、穀物、酒、油の類に至るまで、一切使用禁止、働くなどとは以外の外、男と生れたからには遊んで暮す、勿論、女にしても同じ事、ただし未通おぼこで穢れを知らず、いや、そもそもこの国には君主なるものが存在しない——」（右同）と喋る。

〔六三〕の妻が「魯鈍」と描写され、「無慾にて何ものをも盗み来ざりし」とみられていることと、ゴンザーローの「ただし未通で穢れを知らず」ということには、いわゆる子どものインファンント（言葉を知らない）という語義が共通に重なっている。自然の恵みに何の策略もなく身をまかせることがいかに幸運の源となるかを裏付けている。無欲だから取り引きは無用である。与えられたもの、自然の営みに逆らわないことが即必要なものということになる。執着がなければ努力することもない。努力ということで失う時間にやきもきする必要はまったくない。だからいつだって余裕というものがある。妻は確かに路をさがすために谷の奥へ奥へと向かったのだが、外界へ異界へと境界を越えていく。魯鈍ゆえに境界を踏み越えてしまってから初めてて反応したことは、ただ山男の家かもしれないと思つたときに恐怖を感じたことである。この素朴な恐怖の感覚こそ人を人と思う感受性であり、辛いもまたそこに寄つてくるといえよう。今日の福祉の根拠も経済的支援や機能の重視よりもマイナスを負つた人への共苦という心と心の関係性にあることを示唆しているといえまいか。というよりも障害は非障害に幸をもたらす原点であると思うか否かがためされているのである。富なるものが必ずしも幸の根拠にならないことは事例をあげるまでもなかろう。

さらに、シェクスピアと同じイギリスに生を受けたビートルズのフレーズを思い出す。題名は「魯鈍」そのものを表現している、「丘の上の愚者」『Fool On The Hill』（片岡義男訳）である。訳を引いてみたい。

来る日も来る日も

ただひとり丘のうえに

馬鹿のような薄笑いをうかべたあのひとが
じっと動かずにいる

誰もそのひとと知り合いになりたがらない
見ればただの薄馬鹿のようだし

そのひとのほうでもなにも言わない

しかし丘の上の愚者は
沈んでいく陽を見る

頭のなかの目が

回っている地球を見る

ずっとといったところの

雲のなかに頭をいれ

千の声を持つひとが

完璧な大声で

語つて いる

だがそれを聞く人はいないし

そのひとが放つて いるらしい声を

耳にとめる人もいない

しかし丘の上の愚者は

沈んでいく陽を見る

頭のなかの目が

回つて いる 地球を見る

誰もその人を好いては い ないようだ

その人の勝手にさせて いる

それにそのひとは

けつして自分の感情をあらわさない

しかし丘のうえの愚者は

沈んでいく陽を見る

頭のなかの目が

回っている地球を見る

その人はほかの人たちの『言うことに

耳をかさない

ほかの人たちこそ馬鹿なのだと

知つてゐるから

みんなはその人が嫌いなのだ

丘の上の愚者は

沈んでいく陽を見る

頭のなかの目が

回つてゐる地球を見る（「丘の上の愚者」）

「見れば薄馬鹿のようだし」と見られる愚者。とはいっても「沈んでいく陽を見る」ことによつて瞑想の世界へ入つていき、限りなく聖の領域に接近するのだ。ところが、魯鈍なるものは特別な瞑想に入らずとも同等な領域に位置している。われわれの世界つまり俗世間はぴかぴかの飾りを増やすことによつてしのごうとする世界そのものだが、「馬鹿のような薄笑いをうかべた」愚者は頭のなかの目を通して「回つてゐる地球を見る」のである。世界に感応する触覚を持つてゐるからだ。山男を恐怖する魯鈍な妻の頭にもきっと地球が回つていたにちがいない。

この「六三」の無欲な、魯鈍な妻に対してなまじ知恵を働かせて長者になりたがる婿殿たちはついにマヨイガにたどり着くことが出来ず、長者になつたという話も聞かないという結末をむかえる。

「六四」のほうも全文引用しておく。

金沢村は白望の麓、上閉伊郡の内にてもことに山奥にて、人の往来する者少なし。六七年前この村より栃内村の山崎なる某かかが家に娘の婿を取りたり。この婿実家に行かんとして山路に迷い、またこのマヨイガに行き当りぬ。家のありさま、牛馬雞の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳碗を取り出したる室あり。座敷に鉄瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとするところのよう見え、どこか便所などのあたりに人が立ちてあるように思われたり。茫然として後にはだんだん恐ろしくなり、引き返してついに小国の村里に出でたり。小国にてはこの話を聞きて 実まこととする者もなかりしが、山崎の方にてはそはマヨイガなるべし、行きて膳碗の類を持ち来たり長者にならんとて、婿殿を先に立てて人あまたこれを求めて山の奥に入り、ここに門ありきといふところに來たれども、眼にかかるものもなく空しく帰り來たりぬ。その婿もついに金持になりたりということを聞かず。〔六四〕

〔六三〕のところでは柳田は「魯鈍」ということにあまり意識していたとは見えないと記したが、二つの挿話をわざわざ並べたところを見ると、このとき「魯鈍」「無欲」という課題をえたであろうことは間違いないようだ。後に人に馬鹿にされる人の類型化を通して「たくらた考」（昭和十五年）を洞察するところまでたどりついているからである。そこで「馬鹿」という意味を使っているオタカラやタカラモノといったものがそうした人を大事に扱う時代があつた名残ではないかと柳田は述べるのである。

地方で現在使つて居るものと、参考の為に集めて見ると、一ばん多いのはタクラ・オタクラ・ターカラの類であつた。是は中部地方の両方の海から海まで、東北と西南の端々にも少し形をかへて行はれて居る。たとへば九州は大分県でも、奥州は会津でも南部領でも、出羽は由利郡でも、オタカラ・タカラモノといふ語を馬鹿の意味に、隠語のやうな心持をもつて使つて居る。北陸一帯でダラといふなども、中間のK子音が脱落したもので、同じ語の変化のやうに思はれる。

此以外にもう一つ、アヤカリ又はアイカリといふ名詞を馬鹿の意味に、使つて居る土地も相應に弘いのだが、是は標準語のアヤカルといふ動詞、又は妖怪を意味するアヤカシといふ古語、其他綾とか文とかの漢字をアヤと訓ませたことなどを考へ合せると、何か外部の靈又は隠れた力に動かされて、さうなつて居る場合にだけに、元は限つて居たものらしい。是を生まれ付きの愚物にまで応用したのは後の拡張か、但しは又一般に馬鹿を一種の宗教的現象の如く、看做して居た時代が曾てあつた名残であるか。どうかして明らかにしたいと私は願つて居る。北陸処々の海岸地方では、村の白痴を大事にする風習が近い頃まであつた。其理由は此者が死ぬと鯨に生まれ替つて、浜に寄つて来て村を富ませてくれるものと信じて居たからださうである。つまりは人間はさう無意味に、馬鹿になるもので無いやうに思つて居たのである。(「たくらた考」二)

「たくらた考」に至る仮説をこのとき用意していたとすれば、柳田が「魯鈍」と「欲深」とを対比して〔六三〕と〔六四〕との挿話をともにしながら新領域を開拓していくた泉鏡花は『遠野物語』に先駆けて『高野聖』(明治十三年)において白痴ばかを登場させ、その少年に薬師様の再来と評判になつた婦人おんなが身をゆだねて山に籠もつてから

神変不思議を現するようになる物語を描いた。白痴に身をまかせることによつて神力を得る、福分を戴く道理を描いたともいえる。婦人を单なる妖怪として遇する評価もあるようだがいかがなものだろうか。愚者・白痴の存在がそれにかかるものに福分をわかち与えてくれることの消息を鏡花は明かにしてくれたものと読むことによつて想像の広がりが生まれることを一考すべきだろう。

ドストエフスキイーが『無条件に美しい人間』を描こうとした挙げ句、『白痴』という作品が生まれたというところにも「魯鈍」や「白痴」の存在意義が明確になる点がある。ドーウェーの『アルルの女』のなかにみんなにばかと呼ばれている少年がやつと知恵がついてきたらしいという話をするとところで、しあわせだと思う意見とそれはわからぬという意見とに分かれるところが出てくる。わからないという立場のものがこんなふうにつぶやく。

うちの中にばかが一人いることは、その家の守護おまもりになる。いいかい、この子が生まれてから十五年になるが、ただの一度だってうちの羊は病氣にならないし、桑の木だって傷まないし、ぶどうだって……人間だって……

(『アルルの女』第一幕第三景)

ばかは守護神なのだ。そしてこの後、この子のお蔭なんだとし、もし一度知恵づいたら、わしらは気をつけなくちやならない。皆の星まわりが変わるかもしれないから、と自戒するのは当然である。。

*

椀が流れ来たという椀伝説に似た話として「椀貸伝説」がある。こちらもやはり穴沢とか小淵とか沼の片隅のお釜とか巴淵とか曲淵とかいうふうに水辺の物語となつていて、その淵に行つてお願いしたり、祈つたりすることによつて膳椀が手に入る仕掛けである。数を揃えて返さないと以後出ることはないという結末はほとんどどれも同じ

である。例外的に徳島県那賀郡富岡町の近くの津峯山の岩屋の伝承は水辺にかかわらないものもある。

一例をあげておく。

北谷の沼は一名底なしの沼ともいわれ、沼のかたすみにはお釜と呼ばれる直径一メートルほどの穴がある。

この沼は古くから、祝いごとの時に膳椀を貸してくれることで有名だった。ある日、村の男が沼の主からお膳とお椀を二十人前借りて客の接待をした。ところが返す時になつてお椀が一個足りないのに気づいたが男はそのまま沼に置いてきた。沼の主は怒り、以後村人がいくら頼んでも膳椀を貸してくれなくなつたという。（「椀

貸淵」、『川越の伝説』）

村落共同体ないしは町内会における膳椀は共有しているものを借りたりする風習は全国どこにもあるが、もとは長者の所有になるものであつただろう。膳椀といつてもピンからキリまであるが、富者の立派なそれは伝説を生んだはずだ。水辺を司る家はそれにあやからざるをえない家よりは伝説の根拠となる。冠婚葬祭も業者にまかせる傾向を強めているが、割合、最近まで共有の膳椀を使って宴会を開くことがあったのである。そんな面影を椀貸伝説は確かに保っている。沼や淵の穴などから借りるという話型はほとんどマヨイガから借りたり、盗んだりするのと重なつてくる。

ただ椀貸伝説には長者になるといった話型がないことに注目したい。それは膳椀の由緒あるものは恐らく長者そのものに属していたからにほかなりまいか。膳椀の良否が長者たる地位を位置づけ、宴会をこなすに足る数を所有することが長者の資格を決定したはずである。一族の地位を裏付ける形で優れた膳椀は代々受け継がれたものだろう。おいそれはにわかに調達できるしろものではないのである。だからこの膳椀伝説には借用の伝承がつきまとう。

したがつて、折口信夫が指摘する饗宴と膳椀との関係が浮上してくるのは当然のことである。よき膳椀を饗宴を主催するだけ所有しているのが名家のステイタスシンボルということになる。さすがマレビト理論を打ち立てた本人だけのことはある示唆に満ちた一説である。

一年に一度、数年に一度の客ぶるまいの為に、何十人前かの木具を揃へて蔵して居る家が多かつた。中には、一代一度など言ふのさへ、上流社会にはあつたものである。此話の、さう近代出来でない様子から見ても、小まへ百姓などが、木具の膳椀で、客をする夢も見なかつた頃にも既にあつたらしいことは、鑑定がつく。其では、その前の漆塗りの木具のなかつた時代には、此話はなかつたかと言ふと、其此相応な客席の食器を考へてゐた事も考へられる。だが、其から遡ると、此が伝説でなく、生活そのものであつた時代に行き当る。平安朝以後の公家生活には、時々行はれる大饗などが大事件であった。高官が昇進すると、一階上の上官を正客（尊者といふ）として、大規模な饗宴を催したものである。其夕方、尊者来臨の方式がやかましかつた。宴席の様子が又、不思議なものであつた。まるで、神祭りの夜に、神を迎へる家の心持ちが充ちてゐた。私は、日本の宴会は、都が農村であつた時代から、大した変化もなくひき続いたもので、すべては、神の来る夜の儀式を、くり返してゐたものと信じてゐる。饗宴用の食器に違ひない朱器（盃）・台盤（膳）を、何よりも大切な重宝としたのは、藤原家であつた。大きな藤原一族の族長たる氏^{ウチ}の上の資格は、此食器の所在によつて定まつたのである。宮廷における三神器の意義に近い宝だつたのである。此は、藤原良房の代に作られたものだと言ふ。私は、其時を食器の歴史に革命があつて、古い物を改修した時だと考へて居る。何にしても、食器にさうした意義の生じたのは、氏の上の条件として必行ふべき饗宴があつたことを暗示してゐるからである。（折口信夫「河童の話」四）

折口が言うには客の数が一定していたことから膳椀の数が揃わなければならない理由があつたとする。それゆえ椀貸し穴に正しく返却しなかつたものは再び椀を貸してもらえないという掟は必須であつた。親戚一同が揃う宴席にあるべき食器が欠けた場合、代々受け継いできた伝統の器に対する畏怖の念を長く保ちつづけた名残と見るべきだろう。

その椀が水辺に兆すことは、椀貸伝説のなかで借りたいときに淵とかでお願いするところに消息がある。前日にお願いして翌日に借りるというふうに明確に指定している場合も少なくないが、水辺に富みの水脈があると信じられていた形跡が認めることになるだろう。わたしは幼少水源を所有している家に少なからず引け目を感じていたことを告白せざるをえない。水を他人の世話によるか否かは大きな違いである。

椀貸伝説が単に水辺にかぎらず、隠れ里といった山奥にかかわったり、山の岩屋という設定も当然のなりゆきである。椀を作るには山の木を口クロでくり抜く作業をともない、その材料は山からしか得られないからである。木地屋の存在は山から山へと向かう人たちである。

このへんの事情を推測する手立てはまるでないのだが、里の人と山男の境界に起こった出来事として考えると、少しは見えてくるよう思う。山男の屋敷らしいものはまさに山男の家なのであって、そこにある家具や膳椀は山男の手になる製品なのだ。留守がちだから黙つて持つてきたのであるが、あとで返却したかどうかを問う物語が目立つのは山男の所有物という認識があつたからであろう。それを神と思つたとしても少しも不思議はない。前日夜にお願いして翌朝まで用意してもらうというのはいかにも信憑性を裏付けようとする通俗化の始まつた時点における物語に変貌しているからであろう。膳椀という富者の要素への憧憬を伴つた物語りとして語り継がれている気

配を感じる。

柳田国男の「隠れ里」には椀を貸す主として加賀の古狐の例から佐渡の二つ岩の団三郎貉の例まで紹介されているように謎めいた話にもなるのである。折口が例示した藤原一族の膳椀などは同じ貴族にもなかなか貸し出される代物ではなかつただろう。家宝として滅多なことでは使われることのない食器だとすると、椀貸伝説における不足を生じたりすることは饗宴の主催者にとつて大事件であることが分かる。必死に手配しなければならないところにさまざまな悲喜劇が発生したのである。

第五節 河童伝承

川童の子を産んだ話が扱われる時は『遠野物語』の〔五五〕と〔五六〕においてである。〔五五〕の場所は松崎村の川端であり、二代までつづいて川童の子を孕んだというが、それは二代三代の因縁ではない、などと言うものもあると記す。〔五六〕は上郷村の家の出来事である。この河童伝承の延長に柳田国男は妖怪の範疇をひろげていく。そして長い期間にわたつて調査を重ねていくうちまとまつたものが『妖怪談義』（一九五六年）である。しかし、これらのなかに「川童の子を産む話」を探すことは出来ない。したがつて『遠野物語』の挿活は特殊な事例であることはまちがいない。

〔五五〕の全文を検証してみよう。

川には川童多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。松崎村の川端の家にて、二代まで続けて川童の子を孕みたる者あり。生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めたり。その形きわめて醜怪なるものなりき。女の婿

の里は新張村の何某とて、これも川端の家なり。その主人人にその始終を語れり。かの家の者一同ある日畠に行きて夕方に帰らんとするに、女川の汀に踞りてにこにこと笑いてあり。次の日は昼の休みにまたこの事あり。かくすること日を重ねたりしに、次第にその女のところへ村の何某という者夜々通うといふ噂立ちたり。始めには婿が浜の方へ駄賃附に行きたる留守をのみ窺いたりしが、のちには婿と寝たる夜さえくるようになれる。川童なるべしという評判だんだん高くなりたれば、一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐もなく、

婿の母も行きて娘の側に寝たりしに、深夜にその娘の笑う声を聞きて、さては来てありと知りながら身動きもかなわず、人々いかにともすべきようなかりき。その産はきわめて難産なりしが、或る者のいうには、馬槽に水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのことにて、これを試みたれば果してその通りなりき。その子は手に水搔あり。この娘の母もまたかつて川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずといふ者もあり。この家も如法の豪家にて何の某という士族なり。村委会員をしたこともあり。

〔五五〕

この挿話の語り口は川→川童→猿ヶ石川→川端→婿の里も川端。この順に川の因縁が語られるのだが、いつのまにか川童の子が生まれたに違いないと思ひ込まされるような語りになつてゐる。女が川の汀でにこにこしてゐたなどはうす氣味わるい話であるが、川との結びつきを一貫してゐるのだからもはや手に負えない感じである。生まれた子には水搔まであると断言されると、完全に川童の子にまちがいあるまいと思わざるをえない心境になる。二代や三代の因縁にあらず、などと畳み込まれると疑いの余地はないと思つてしまふのだ。豪家であり、士族である、村委会員をもつとめた家系であるといつたふうに異変が起ころはづないといつた事實性を突きつけられると、逆に何かの間違いで川童と氣脈を通じた不思議な物語として信じざるをえなくなる。こんなふうな仕組みでぐいぐいと

語られる柳田国男特有の語り口の「五五」である。

いささかの疑問もはさむことなく語られる「五五」は実におどろおどろしい話である。柳田はこの逸話を採用するにあたつていささかの疑念もいだかなかつたのか、それとも内心少しなりともためらいがあつたか、今となつては詮索するすべはない。これは伝承というよりは噂話に近いものである。しかし、『古事記』『日本書紀』に語られる水辺の伝承としての丹塗矢による妊娠という「カワヤ」が川に通じていた時代の空想のたくましさを示す挿話があることを思えば、孕むことへの想像力は途方もないほうへと羽ばたいていた時代があつたことを裏付ける。泉鏡花の『高野聖』のなかに「御坊は、孤家の周囲で、猿を見たらう、躄を見たらう、蝙蝠を見たであらう、兎も蛇も皆嬢様に谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩！」（『高野聖』二十六）という箇所がある。水辺には魑魅魍魎が暗躍し、女にまとわりつくが、自在にあやつる。相米慎一監督の映画『あ、春』には死んだはずの父親が突然、現れてムコ同然の息子の家に居ついてしまい、それを追い出そうとしてあの手この手を尽くすが、実の母親が乗り込んできて実はあんたの子ではない、と言つて父親を愕然とさせる光景が描かれる。それが女のみぞ知る秘密——。水辺にたむろする女となれば丹塗矢に始まり、河童や蛇やら交わる相手はさだかでなくなるばかりだ。

この話を知ったときからわたしは、三木成夫の『胎児の世界』という一冊のなかに見つけた「胎児は、受胎の日から指折り数えて三〇日を過ぎてから僅か一週間で、あの一億年を費やした脊椎動物の上陸誌を夢のごとくに再現する」という一節を思い出し、それを重ねていた。本文のなかに受胎三十一日の図像が掲げられているが、そのキャプションをそのまま写しておくと、「いわゆる妊娠2か月下旬。月経がやつて来ないので、このころからおめでたに気づきはじめる。ちょうど鰓と原始肺が共存するデボン紀の初期、上陸と陸海の二者択一を迫られた古代魚類の

時期」という説明になつてゐる。また本文に目を移すと、「おれたちの祖先は、見よ！　このとおり鰐をもつた魚だつたのだ」ともある。魚のあとには両生類などの姿も見せるのだから、手に水搔ぐらいあつても不思議はないのである。この三木説から考えたとき、奇形というのは脊椎動物の発展史の途中の形態をもつて誕生する場合のことにはかならない。水搔があるからと言つて想像上で一番近い川童と結びつけることになつてゐるわけだが、これしか救済の方法がなかつたにちがいないのである。奇形児の誕生を救済する便法として川童を孕んだ伝説が生まれたとしか考えられない。

案の定、「五五」をめぐつて医学からのアプローチがあつた。水搔は骨系統の異常による合指症というものであることを指摘する見解が出てきたのである。水搔イコール川童ではないことが明らかになつたのである。

岩本由輝氏がかつて「生まれし子は斬り刻みて一升樽に入れ、土中に埋めた」ということを「間引きを正当化するための口実として利用されている」（『もう一つの遠野物語』）と記したところ、岡山大学医学部附属脳代謝研究施設の小児科専攻の岡鎌次氏から「奇型児の出生に驚き怖れ、養育せずに河童の子として死なせた話とみるべきで、河童の子とされたのはおそらく頭部や顔面や手足に奇型を示すアペール症候群という疾患によるもの」という指摘があつたといふ。

アペール症候群は常染色体性優性遺伝というから親が一人とも健常者であれば発生しないことになるが、「次第に女のところへ村の何某という者夜々通うという噂立ちたり」とあるように他の男との密通があつた気配があるので、その男が異常な遺伝子をかかえていたことになる。「五六」の挿話「川童らしき物の子を産みたることあり」ということはアペール症候群という扱いになるだろう。しかし、「ふと思ひ直し、惜しきものなり、売りて見せ物

にせば金になるべきにて立ち帰りたるに、早取り隠されて見えざりき」とあるように「六四」の欲深の者が長者になろうとして長者になれなかつた話と類型である。柳田国男の経済的な欲張りの意図に対する警戒心がはたらいているようだ。もちろん、柳田の取捨選択もはたらいているが、もとより伝承の風土にも経済一点張りに対する警戒心があつたことも間違いない。

河童の子を産んだ話は岩手県紫波郡の村などにもあつたようだ。やはり赤ん坊を処置しているところを見ると、受容しがたいほど醜かつたのだろう。それが想像上の河童に酷似してることで河童ということで片づけることになつたのだ。佐々木喜善の採集にも次のような事例があがつていて、当時、奇形を河童として処置する風習があつたと見える。

煙山村大字赤林、小笠原某の先々代の妻女は、知らない男が通ふと思うて居るうちに臨月になつた。然るに此女は産室に人を近寄せないので、皆は不審に思ひ、窃に物蔭から其の様子を窺うて居ると、産室には誰も居らない筈なのに、何か小声でクヤクヤと話す声が聞へた。そのうちに安々と産声があがつたので、人々は室に入つて見ると、之は驚くべし女は河童の赤ん坊を生んで居た。家人は人知れず近所の鹿島川へそれを流したとの事である。

又大字矢次の高橋某と云ふ家でも、昔矢張り河童の子を生んだ女があつたさうである。（佐々木喜善「三〇、河童の子を生んだ女」）、「農民俚諺」

〔五七〕は猿と河童との類似性をいう根拠として採用しているようだ。足跡というと誰かが目撃したという証拠になるため、この挿話は河童の存在を信憑性のあるものとして印象づける。

〔五八〕は河童駒引の逸話の典型なのでそのまま引用しておく。

小鳥瀬川の姥子淵こがらせかわのあばこの辺に、新屋の家という家あり。ある日淵へ馬を冷しに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩の前に来たり、馬槽に覆われてありき。家のもの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて殺さんか宥ゆるさんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりといふ。〔五八〕

これは柳田の『山島民譚集』のなかの「河童駒引」挿話の典型といつてよい。柳田自身、〔五八〕の注解の体裁で「この話などは類型全国に充満せり」というほど河童伝承の類型に属するものである。「馬を引く」という河童の行為がとがめられ、「堅き約束」をして解放される。これは「謝罪」をしたり、「誓い」をさせられたりする場合もある。「河童駒引」という言葉は「馬を引く」ことに河童を結び付けて、柳田が考えたものだが、コマヒキという言葉は馬を引くということに伴うものであるから古くからあつたのである。

河童駒引についての柳田国男の結論はつぎのようになる。

伝説ハ恰モ春ノ野ノ陽炎ノ如シ。能ク我等ガ望ム所ニ向ヒテ発展ス。唯夫レ陽炎ノ如クナルガ故ニ、従前ノ信仰ハ少ナクモ其形式ノ上ニ於テハ此ガ為ニ一朝ノ変革ヲ受クルコト無ク、永ク其痕跡ヲ故土ニ留ムルナリ。天然ノ神々ガ人間ノ便宜ニ抵抗スル能ハズシテ徐ロニ其威力ヲ収メ、終ニハ腑甲斐無キ魑魅魍魎ノ分際ニ退却スルコトハ何レノ民族ニ於テモ常ニ然リ。而モ彼等ガ既ニ其結界ヲ明渡シ其犠牲ヲ思切リテ後モ、責メテハ型バカリノ昔ノ祭ヲ要求シ、且ツハ氣味悪キ儀式ヲ繰返シテ畏怖ノ記念ヲ新ナラシメ、且ツハ之ニ由リテ敗北ノ

失望ヲ慰メラレントスルモノ往々ニシテコレ有リ。サレバ彼ノ馬ヲ水辺ノ杙ニ繫ギテ河童ノ祭ト称スル土佐ノ例ノ如キモ、恐クハ又「ミヅチ」ニ対スル最少限度ノ養老金ノ類ニシテ、更ニ多クノ洗足池馬洗淵ノ地名ハ、由来不明ナル各地ノ駒繫松ナドト共ニ、年々馬ヲ水ノ神ニ供ヘタル上古ノ儀式ヲ、イツト無ク農民ノ好都合ニ解釈シテ、之ヲ以テ其馬ノ災害ヲ除去スル一手段ト見ルニ至リシモノ、久シキヲ経て再ビ其理由ヲ忘ル、ニ至リリシナルベシ。牛馬ノ首ヲ水ノ神ニ捧グル風ハ、雨乞ノ祈祷トシテハ永ク存シタリキ。朝鮮扶餘縣ノ白馬江ニハ釣龍台ト云フ大岩アリ。唐ノ蘇定方百濟ニ攻入リシ時、此河ヲ渡ラントシテ風雨ニアヒ、仍テ白馬ヲ餌トシテ龍ヲ一匹釣上げタリト云フ話ヲ伝ヘタリ〔東国輿地覽十八〕。白キ馬ハ神ノ最モ好ム物ナリシコト、旧日本ニ於テモ多クノ例アリ。(「河童駒引」)

つまり水神(河童)に生贊として駒(馬)を献ずる風習の名残があつて、その延長上に河童駒引の伝説が起こつたというわけである。確かに延喜式に「大旱には黒馬を献じ 霖雨には白馬を献じた」とあるように旱魃や雨氣味のときには馬を献じた様子がうかがわることからして馬を水神に献上するという柳田説は信頼するにたるのだが、柳田が「馬蹄石」に「水辺ニ牧ヲ構ヘテ龍種ヲ求ム」という中国渡来の伝説の日本における実例をあげている点を考えると、河童の悪戯とばかりは言えないことが見えてくる。龍馬が龍の胤という伝説の由来を教える事例であるが、水辺の危険を冒したほうが立派な馬を授かるということになるのである。

このへんの事情は石田英一郎の『河童駒引考』の第一章の「馬と水神」が柳田国男説をさらに発展させる形で多くの事例を集めている。石田は『千夜一夜物語』から引用している次の箇所は柳田も指摘した「水辺に牧を構えて龍種を求む」の俗信に通じる。

毎月新月のころ、われわれはまだ雄を知らぬもつとも良い雌馬どもをつれてきて、海岸につないでおき、誰にも見つからぬようこの地下室にかくれてしているのです。するとやがて海の種馬たちは、雌馬の香を嗅いで水中からあらわれ、誰もいないのをみると雌馬にとびかかってこれを自由にします。交尾を終えると彼らは雌馬たちと一緒に連れ去ろうとしますが、長い綱でつないので、つれていくことができません。そこで奴らは雌馬にむかって叫んだり、突いたり、蹴つたりするのですが、われわれはそれをきいて種馬どもがすでに雌馬からおりたことを知り、駆けだして奴らをどなりつけると、奴らは驚きおそれて海の中にかえります。まもなく雌馬たちは、彼らの胤を宿して雄駒や雌駒を生みますが、その値は莫大なもので、またこのような子馬は、この地上にまたと見つけることができません。（石田英一郎「馬と水神」、『河童駒引考』）

龍種を求める俗信は世界共通であることが明らかになっている。

〔五七〕に「猿の足と同じく親指は離れて人間の手の跡に似たり」とあるが、河童が猿と見まごう相手であることを示している。〔五九〕では「遠野の川童は面の色赭きなり」とあるように猿との類似がおつてくる。泉鏡花は「化鳥」に川辺につながれた猿を登場させているが、猿と水辺の脈絡は縁起ものとして古くから存在した。やがて猿回しなどにつながっていくものとなる。折口信夫もその消息を次のように伝えている。

日吉の使はしめの猿は、水の良否をよく見分ける。湖水近くおりて居て、水を見て居る。そして、最淨い水の到るのを待つて、神に告げて、神の禊ぎをとり行ふ。かうした信仰から悪い水や、水の中に邪惡の潜んで居る事をも、よく悟るとせられた。此考へから、屋敷の水を讚めるのを中心とした、庭のことほぎには、猿が出て来る様になつた。其から拡つて、屋敷・建て物の祝福や、屋敷に入り来る邪惡・疫癪退散の為にも、猿を舞

はせる風を生じた。（折口信夫「河童の話」）

柳田国男も「河童駒引」のなかで「猿ノ水中ニ住ムト云フコトハ何分ニモ信ジ難キ話ナレドモ、鬼ニ角昔ノ人ハ此ノ如キ一種ノ猿ヲ見聞セシ者多カリキト覺シク、今も府県ノ地名ニ猿ケ淵又ハ猿猴淵ナドト云フモノ少ナカラズ」と述べているとおりであり、佐々木喜善も柳田の「河童駒引」を収めた『山島民譚集（一）』（大正二年）を読み、しぶしぶ河童と猿の異名同体であることを認めている。

山島民譚集前半は拝見致候。兼ての御説なる河童と猿と異名同体なること、色々と御説明を拝読するに及び、
「渋々ながらもうなづかる、節有之候。（佐々木喜善「山島民譚集を読む」）

「渋々ながら」と述べているように佐々木は十分に納得したわけではない。小鳥瀬川の淵で農夫の妻が淵で顔を洗おうとしたとき岩の上に赤い小児のようなものを見つけ、とたんに睡魔に襲われて前後不覚に眠ってしまうのが、その者と関係が出来てしまう。そして生まれた子が人間の形をしていたというのである。幻覚か現実か判定しがたいが、河童の子を孕んだ話が短絡ではないかも知れないと思わされる。

しかし、佐々木は猿と河童の異名同体説にはなかなか与みしがたいといった趣で発言をつづける。

猿館にては夏の日などは猿ども淵に入りて水浴をして居る処をよく見ると云ふ。又彼等の深山から里へ下るには多くは谷川を伝ひ来ると云ふ。併しそんな事にて直ちに猿を河童とは断定し難かるべく、学者が千万の引例も実見の一証に及ばず候。（中略）

当地の人は猿と河童とを全く見分ける能力を有するやうにて候。私は敢て貴説に反対する者に非ず。反対したとて負けるのが火を見るよりも明かにて候。私も未だ河童を見しことあらず。その如何様の物なるかは存じ

候はねど、猿なりとは一概にも信じ兼ね申候。貴論の肯定説を信ずる迄に多く知り度、又御著を読み終りたらば別途の光明も見申すべきかと樂みに致し居り候。（「小島民譚集を読む」）

ここでわたしは若尾五雄の『河童の荒魂——河童は渦巻である』という労作を持ち出したい。若尾氏は河童に猿を結びつけた点に異論を呈している。そこに「柳田国男は、昔はアニミズム的で、森羅万象を生物的に呼称することは知りつつも、その生態に対しての知識の裏付けが欠如していたために、河童の解明に失敗した。即ち、河童は本来、自然の交代、その他、交わることのアニミズム的表現として、人間の子供にその名を託していたことに気がつかなかつたのである。駒引は句馬であり、句型のこと、それは交じれる渦の姿であり、カハの意味の、交——カハツパ——カツパなのである」（同書、「IV 河童と河渦」と記す。水辺における渦巻の現象は人間界に大事件をもたらしたことは言うまでもないが、それが幻の幻獣・河童をもたらしているのである。佐々木喜善が柳田国男の論証力にかなわないと見て、中途半端なスタンスで対処することになった背景に若尾氏のような「渦巻」説が加われば、もつと早く見直す契機になつたにちがいない。

〔五九〕において「外の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川童は面の色赭きなり」と断定するところにも恐らく柳田の河童と猿の結びつきを確信する予断があつたにちがいない。

河童という幻獣に近い存在を猿に相似化させてしまつたことによつて空想をしほませてまつたことは否めない。その点、若尾氏の渦巻説は空想を雄大にならしめてくれる。それに比して柳田が誠意を尽くして類例を羅列すればするほど河童のアニミズム的な領域への幻想をなえさせてしまうことに気がつく。水辺の物語の類話ももつて牽強付会して括ることは渦巻の持つ謎めいた神秘をそいでしまうことになつた。古代人の渦巻をデザイン的に三つ巴と

も譬え、×やとぐろを対比したアナロジーをする詩人たる能力はわれわれ近代人の比ではないかもしない。そんな謎の現象を昔の人は人間の世界に引きつけて名前をつけ、具体化していたのである。短終的な河童イコール猿説を見ていると、昔の詩人の言葉の喻を安易に即物的な結び付け方をしていないかと懸念せざるをえない。

参考文献

- 『遠野物語拾遺』（『柳田國男全集 2』筑摩書房、一九九七年）
 後藤総一郎監修『注釈 遠野物語』筑摩書房、一九九七年
 「海の水はなぜからい？」（『太陽の東 月の西 岩波少年文庫162』佐藤俊彦訳、岩波書店、一九五八年）
 佐々木喜善「黄金の挽臼」（『旅と伝説』一九二九年一月）
 「塩ひき臼」（小沢俊夫編『世界の民話 3 北欧』ぎょうせい、一九七六年）
 グリム「おいしいおかゆ」（『グリム童話集 第四冊』金田鬼一訳、一九五四年）
 「塩吹臼」（関敬吾『日本昔話集成 第二部2』角川書店、一九五三年）
 「塩吹臼」（佐々木喜善『老嫗夜譚』、『佐々木喜善 全集 I』遠野市立博物館、一九八六年）
 三輪茂雄『臼』法政大学出版局、一九七八年
 千宝『搜神記 東洋文庫10』竹田晃訳、平凡社、一九六四年
 『酉陽雜俎 3』今村与志雄訳、平凡社、一九八一年
 澤田瑞穂「竜宮伝書——水神に手紙を届ける話——」（野村純一編『日本昔話研究集成 5 昔話と文学』名著出版、一九八四年）
 李朝威『柳毅の物語』前野直彬訳（『中国古典文学全集 六朝・唐・宋小説集 第6巻』平凡社、一九五九年）
 『竹取物語』阪倉篤義校訂、岩波文庫、一九七〇年
 柳田国男「御刀代田考」（『定本柳田國男集 第十三巻』筑摩書房、一九六九年）
 『今昔物語 本朝世俗部 三 新潮日本古典集成』新潮社、一九八一年
 「黄金の臼」（佐々木喜善『聽耳草紙』ちくま文庫、一九九三年）
 桜井徳太郎『昔話の民俗学』講談社、一九九六年

- 日本放送協会編『日本昔話名彙』日本放送出版協会、一九四八年
 「ひよつとこの始まり」（『江刺郡昔話』、「佐々木喜善 全集 I』前出同）
- 柳田国男「海神少童」（『定本柳田國男集 第八卷』筑摩書房、一九六九年）
 内藤正敏「ヒヨウトク譚のヘソに隠された金属伝承」（小松和彦編『日本昔話研究集成 1 昔話研究の課題』名著出版、一九八五年）
- 関敬吾『日本昔話集成 第二部2』角川書店、一九五三年
- 朝日祥次郎「鏡花の橋姫」（『鏡花全集 卷五』月報5、岩波書店、一九七四年）
 泉鏡花「南地心中」（『鏡花全集 卷十四』岩波書店、一九四二年）
- 泉鏡花「夏の夜の夢 あらし」新潮文庫、一九七一年
 シエクスピア「あらし」（福田恆存訳、角川文庫、一九七三年）
- ビートルズ『ビートルズ詩集 1』片岡義男訳、角川文庫、一九七三年
- 柳田国男「たくらた考」（『定本柳田國男集 第七卷』筑摩書房、一九六八年）
 柳田国男「妖怪談義」（『定本柳田國男集 第四卷』筑摩書房、一九六八年）
 ドーデー「アルルの女」桜田佐訳、岩波文庫、一九四一年
- 大野智也・芝正夫「福子の伝承——民俗学と地域福祉の接点から——」堺屋図書、一九八三年
- 柳田国男「河童の話」（『折口信夫全集 第三卷』中公文庫、一九七五年）
 「椀貸淵」、「川越の伝説」（宮田登編『日本伝説大系 第五卷』みずうみ書房、一九八六年）
- 折口信夫「河童の話」（『折口信夫全集 第三卷』中公文庫、一九七五年）
- 泉鏡花「高野聖」（『鏡花全集 卷五』岩波書店、一九四〇年）
- 三木成夫「胎児の世界」中公新書、一九八三年
- 岩本由輝「もう一つの遠野物語」刀水書房、一九九二年
- 岩本由輝「遠野の河童」（『柳田国男を読み直す』世界思想社、一九九〇年）
- 三浦佑之「村落伝承論」五柳書院、一九八七年
- 柳田国男「河童駒引」（『山島民譚集1』、「定本柳田國男集 第二十七卷』筑摩書房、一九六七年）
 佐々木喜善「農民俚諺」（『佐々木喜善 全集 I』前出同）
- 石田英一郎「河童駒引考」岩波文庫、一九九四年

折口信夫 「河童の話」（『折口信夫全集 第三巻』中公文庫、一九七五年）
佐々木喜善 「山島民譚集を読む」（『郷土研究』第二巻、第八号、一九一四年）
若尾五雄 『河童の荒魂』堺屋図書、一九八九年
原美穂子 『遠野の河童たち』風琳堂、一九九二年